

6 年度 幼保連携型認定こども園教育・保育要領に基づく自己評価

作成日

令和7年3月27日

法人名

園名

育生会

こばとこども園

まとめ

全体平均

4.84

第2章第2節 乳児期の園児の保育	子どもたちは、一人ひとりの発達に合った生活のリズムの中で、愛情豊かに応答的に保育が行われ、健やかにのびのびと育つことが出来ている。保護者アンケートの結果もほとんど否定的な意見が見られず、各保育教諭が、身体的発達・社会的発達・精神的発達について良く理解し、子ども一人ひとりに丁寧に関わってきたことが評価されたといえる。
第2章第3節 満1歳以上満3歳未満の園児の保育	「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の五つの領域が密接に関連しあうことを意識し、この時期の園児にふさわしい生活や遊びの充実が図られるよう関わった。著しい発達の見られる時期であり、また、生活や遊びの中心が大人との関係から園児同士の関係へと移っていく時期でもあるため、園児一人ひとりに応じた発達への援助を行った。
第2章第4節 満3歳以上の園児の教育及び保育	昨年度に引き続き、子どもが自分で考えて自分で決めることを通して主体性を育むことを目的に、サークルタイムを行う機会を設けた。サークルタイムは、特に人間関係・言葉・表現の領域の発達に大きく寄与し、個の成長と集団としての活動の充実が図られた。活動内容については、人間関係の領域で、地域とのつながりをもっと意識したいとの反省が上がり今後の課題である。
第2章第5節 教育及び保育の実践に関わる配慮事項	一人ひとりの発育及び発達状態や健康状態については、看護師や栄養士等の専門職と連携しつつ保育教諭の応答的な関わりを基本とし、適切な判断に基づく保健的な対応を行った。また、園児が自ら周囲に働きかけ試行錯誤しつつ自分の力で行う活動を見守りながら、園児のことを信じて待つ対応を心がけた。国籍や文化の違いの配慮については、外国籍の園児がいない中で、英会話活動や食育活動等で多文化共生の教育保育を進めた。
第3章 健康及び安全	全職員がそれぞれの専門性を生かしながら、組織として、園児の安全と安心を考えながら進めた。しかしながら、保護者アンケートでは職員同士の連携に対しては今年度も良い評価といえず、引き続き課題である。健康支援では、看護師不在の際の対応や感染症対応などでの保護者と園の認識の差をどう解消していくか等課題も見つかっている。食育の推進では、積極的な食育活動を行い、食への興味が広がった。環境及び衛生管理並びに安全管理では、冬期園全体の低湿度の解消が課題である。災害への備えについては、有事に慌てないように訓練の際に食材だけでなく災害用品のローリングストックも考えて行く。
第4章 子育ての支援	子育ての支援について、多機能化を進めているが、今後も既存の支援内容をアップデートしながら継続して行く。保護者アンケートでは、保護者の自己決定を尊重しているかどうか等の支援に関する項目の評価が高評価と言えなかったため、どういう場面で保護者がそう感じたのか理由を聞くなどして原因を探る必要がある。その上で、改善すべきところは改善して行きたい。
第5章 職員の資質向上	毎日の保育内容のふりかえり、毎月の保育内容のふりかえり、年度の自己評価などで職員の話し合いを通した園の自己評価に力を入れている。職員が話し合いをすることで、保育内容の共有はもちろん、保育の価値観のすり合わせができ、職員の質の向上に繋がっている。資質向上に不可欠な研修受講については、研修時間の確保が課題ではあるが、園内研修のさらなる充実と外部研修の自主的積極的な受講を促進したい。
総合	令和3年度全体平均4.40、令和4年度4.77、令和5年度4.83、今年度は4.84であった。毎年度少しずつ自己評価総合評価の数値が上がっていることと保護者アンケートでの評価が上がってきたことは、職員全員が、幼保連携型認定こども園教育・保育要領に則り、日々の教育保育を行っている結果と受け止めたい。毎年度自己評価の話し合いで、今後の課題が見つかることから、常に自分たちを客観的に見つめ、より良い教育保育を目指していく姿勢を継続していきたい。それぞれ専門性を持った職員が年齢・立場・役割を超えて連携し、保育の質を向上させて行くには、良好なコミュニケーションが欠かせないため、職員全員で職場の心理的安全性を保つことを心がけていく。

データ表

内容	項目数	平均
「乳児保育」	15	5.00
「3歳未満児保育」	32	4.97
「3歳以上児保育」	53	4.75
「教育保育の配慮事項」	16	4.90
「健康・安全」	29	4.93
「子育ての支援」	14	4.64
「職員の資質向上」	9	4.56
計	168	4.84

データグラフ

